

## 中村古峡資料群を読み解く — 雑誌『黎明』を中心に

愛知淑徳大学 竹内瑞穂

### はじめに — 中村古峡資料群の概要およびそのデータベース化について

中村古峡（本名：蔚 1881（明治 14）－1952（昭和 27））は、現在の奈良県生駒市に生まれ、第一高等学校、東京帝国大学文科大学文学科を経て、夏目漱石門下の小説家として世に出た人物である。代表作に、弟の精神病発症を題材とした自伝的小説『殻』（『東京朝日新聞』1911（明治 44）.7－12）がある。その後、活動の軸足を心理学研究へと移し、大正期の〈変態〉ブーム<sup>1</sup>の一端を担った雑誌『変態心理』（1917（大正 6）創刊）の主幹として活躍することになる。

現代の「変態」という言葉の持つイメージから誤解を招きがちではあるが、当時の変態心理学とは、精神病や精神上の発達障害、さらには催眠術、神懸かり、テレパシーといった、種々の〈普通〉からは逸脱した心理的作用を扱う心理学の一分野であり、『変態心理』もいたって面白目な学術志向の雑誌であった。古峡は弟の精神病に対して有効な手が打てなかった精神医療の現状を打破するためにも、この雑誌を人間のいまだ不可解な心理を探究し、新たな精神医学や心理療法を生み出すための基盤としようとしたのである。その挑戦的な姿勢は執筆者の顔ぶれにも表れており、心理学にとどまらず、心霊学、文学、医学、生物学、教育学、社会学等々の多様な研究者たちの論考が掲載されることになった。

この『変態心理』は経営上の問題もあり、1926（大正 15）年には休刊となるが、古峡は同年 45 歳で東京医学専門学校に編入学し、2 年後には医師免許を取得。以後は精神科医として東京・品川の診療所<sup>2</sup>と千葉・千葉寺の中村古峡療養所（1934（昭和 9）開所）を経営しつつ、直接患者の治療に携わっていく。

必要とあらば、ためらうことなく新しい舞台へと飛び込んでいった古峡だが、養子として病院を継いだ中村民男の回想によれば、別の一面もあったようだ。古峡は古い物が捨てられない人であった。物置や押入れのみならず、あまりつかわない部屋までもが様々な資料・書類・療養日誌やカルテ等でぎっしり詰まっており、みかねた民男が整理をしようものなら、お前は「整頓界の権威」かと皮肉る有様だったという<sup>3</sup>。

関東大震災やアジア太平洋戦争下の空襲によって失われたものも多かったようだが、療養所の後継である中村古峡記念病院には、現在でも彼が遺した資料群が保管されている<sup>4</sup>。そこには蔵書をはじめ、自筆日記（1897（明治 30）－1948（昭和 23）。一部欠巻あり）、『変態心理』誌、中型箇笥一棹に詰め込まれた書簡類、さらに著作原稿や療養所運営に関わる事務的書類などの雑資料も多く残されているのだが、珍しいところでは一高在学中に同級生だった森田草平や生田長江らと制作していた手書きの回覧雑誌『夕づゝ』（第 3・4 号。ともに 1902（明治

35)) などの稀観本もみることができる。その雑然さも含め、この資料群には古峠の糺余曲折に満ちた人生の歩みがそのまま反映されているといえるかもしない。

さらに、この資料群の価値を高めているのは、戦前から戦後にかけての患者らの療養日誌や、療養所で刊行されていた雑誌『黎明』といった、中村古峠療養所が独自に展開していた治療実践の実態を知ることができる貴重な資料が数多く残されている点だ。

療養日誌は、中村古峠療養所の寮（病棟）に入って療養する患者たちが、その日その日の活動や感想を書き込んだ一種の日記である。ただし、それは自由意志で書かれる私的な日記ではなく、あくまで治療の一環として導入されたものであった。入院患者は毎晩 9 時までに各自の日誌（当初は市販の雑記帳、のちに項目ごとの欄が設定されたプリントに変更）を記入し就寝。日誌は回収され、古峠（あるいは中島作業部長）による検閲・朱記の上で翌日に返却<sup>5</sup>。最終的には患者ごとに取りまとめて、検診録とともに病院で保管された。日々繰り返されていく療養日誌の執筆／返却のサイクルは、古峠が重視した作業訓練と並んで、療養所の治療実践にとって欠かすことのできない役割を担っていたのである。

1949(昭和 24)年の段階では、空襲から守り通した「昭和十年以降の新入院患者約二千有余名の療養日誌が、物置にぎつシリ詰まつて」いると古峠は書き残しているが、資料群に現存が確認できているのは 600 点ほどとなっている。中村民男によると、空襲のときには保管されていた物置にも放水せざるを得ず、実際には多くの療養日誌が水に浸かってしまったという<sup>6</sup>。結果、保存状態の悪化によって破棄せざるを得なくなつたものも少なくなかつたと推察される。

今回のデータベース化にあたっては、療養日誌のほか、現存する『黎明』58 冊（1934 年 1 月～1948 年 9 月）、『中村古峠療養所案内』（非売品、1939 年 9 月 15 日発行）、『作業療法の指導とその治療的効果』（日本精神医学会 1949）を収録する。中村古峠資料群に残された資料のうちで、これまで非公開であったり、公共図書館などでは所蔵がなかつたりした希少性が高いもの。そのなかでも、古峠および彼の療養所の治療実践を知るために特に欠かせない 4 種類を選ばせてもらった。

このうち、まず『中村古峠療養所案内』に触れておこう。本冊子は主に入院希望者に向けたもので、実施されている治療の概要に加えて、療養所の沿革、世評、入院手続きの案内などが掲載されている。40 ページほどの小冊子ではあるが、冒頭には療養所の見取図や生活の様子を写した 6 枚の写真なども載せられており、当時の療養所内の様子を垣間見ることができる貴重な資料ともなっている。

なお、データベースに所収された冊子では、裏表紙の案内 3 件（東京診療所、相談料、古峠著書の取次について）には取り消し線が引かれている（資料番号 [R\\_01226](#)）。実は、これらはすべて戦後には条件が変わり、無効になってしまう項目である<sup>7</sup>。そこに取り消し線が引かれているというのは、戦後になつても変更があつた箇所だけを消して、以前印刷したものをお配布し続けていたということだろうか。もしそうだとすれば、未修正の箇所については、

療養所の側としては変える必要がないと判断していたということになるだろう。本冊子には、中村古峠療養所の活動の一端のみならず、その運営者たちが戦前から戦後まで一貫して抱き続けた〈私たちの施設、そして治療とはこういうものである〉という自己像もまた映し出されているのかもしれない。

『作業療法の指導とその治療的效果』(資料番号 [R\\_01227](#)) は、古峠が 1941 年 12 月に名古屋帝国大学に提出した学位申請論文「精神病質者ニ実験的ニ施シタル諸種作業ノ治療的效果」(1942 年 2 月に『名古屋医学会雑誌』55 卷 2 号で発表。同年 7 月に医学博士の学位取得) を増補し、自身が運営する日本精神医学会から単行本として刊行したものである。学位申請論文の指導を担当したのは杉田直樹。東京帝国大学医学部助教授から松沢病院副院長を経て、名古屋帝国大学医学部教授となった人物で、古峠とは彼が『変態心理』誌の寄稿者だった大正期からの付き合いであった。

本書は、療養所での実践に基づいた作業療法の指導法の提示と、1929 年 7 月から 1941 年 6 月にかけて実際に療養所で正規の作業訓練を行なった「精神病質者」721 名に対する治療効果の分析を軸とする(なお、学位申請論文では後者の分析パートが主となっており、前者の具体的な指導法については単行本化にあたって大幅な加筆がなされている点には注意が必要)。「精神病質者」とは「神経質」「ヒステリー」「躁鬱病」「変質者」「精神発育制止症」「精神分裂病」の 6 種類で構成されるとされ、具体的な数値やグラフなどを積極的に用いつつ、それぞれのタイプごとに異なる作業療法の治療効果が検証されている。

精神医学者の見地からこの古峠の学位論文に言及した小田晋は、ここでは「統制群(対称群)」を取ってこれを統計的に比較検討を行っているわけではないが、上記六群 [=精神病質者の 6 種類] の比較を行い、それに人口統計学的な指標による比較検討を行っているのであるから、当時のこの種の研究としては、標準的な方法による分析を行っており、また「精神病質者に対する治療の試み、それも作業療法の試みであるという点」では、「先駆的な試みであって、本来、発表媒体によってはもっと評価されてしかるべきものであった」と位置付けている<sup>8</sup>。

療養日誌は、本データベースで最大の比率を占める資料である。ただし、現存するものすべてが収録されているわけではなく、1935(昭和 10)年 10 月から 1948(昭和 23)年 8 月のおよそ 14 年間のうち、プリントされた定型フォーマットを用いて書かれた 541 点(合本は 1 点として計数)を対象としている。(療養日誌のうちで最もよく知られた中原中也の日誌については、大学ノートに記載されており定型から外れていること、またすでに『ユリイカ』(32(8) 2000.6) の誌面や「国書データベース」等で全文の写真版が公開されていることを踏まえ、データベースへの収録は見送った)。

この期間に対象を絞った理由は、起点についていえば、療養日誌のフォーマットが安定し、記入された年月日などが確実に特定できるようになってくるのがこの時期以降だったからだ。また終点を 1948 年 8 月としたのは、雑誌『黎明』の終刊に合わせた結果である<sup>9</sup>。のち

に触れるように、この『黎明』終刊のタイミングで古峡もまた自身の活動の重点を新たな方向へと切り替えていく。したがって、この時点を古峡による精神療法と資料群における大きな区切りとすることには、一定の妥当性があると考えている。

ここまで、中村古峡資料群と今回のデータベースについての基礎的な情報を確認してきたが、本稿が主に取り上げるのはそのうちの雑誌『黎明』についてである。サイズは菊判(150 mm × 220 mm)、のちに A5 判(148 mm × 210 mm)。ページ数は時期によってかなり幅があり、20 ページ以下の時もあれば 60 ページ近い時もあるが、いずれにせよそれほど大部の雑誌ではない。1934 年 1 月に中村古峡診療所内で創刊された本誌は、終戦前後の一時休刊を挟みつつ、1948 年 9 月 (14 (9)) まで刊行された。資料群の調査の過程で、58 冊(複本を除く)が発見されているものの、欠号も少なくない。さらには、編集の遅れのため一冊に「六・七・八号」のように複数の号数が付けられたり、休刊扱いにして号を飛ばしたりするケースも多く、総刊行号数を確定することは困難である。

『黎明』の名は、一部の研究者には中原中也の詩「道修山夜曲」の初出誌として記憶されているかもしれない<sup>10</sup>。だが、資料の欠落の多さに加え、当初はごく一部にしか流通していなかった会員制雑誌であったことも災いしてか、これまで本誌自体が総体的に論じられるることはなかった。不明な点も少なくない『黎明』ではあるが、本稿では残された資料を最大限用いて、その大まかな輪郭を描き出すことを試みたい。

## I. 『黎明』の時期区分と前期の特徴

『黎明』は、戦況悪化と敗戦後の混乱によって休刊を余儀なくされた 21 ヶ月の期間(1945(昭和 20) .4–1946(昭和 21).12)<sup>11</sup>を分断線として、前期 (1(1) – 12 (3)) と後期 (13 (1) – 14 (9)) とに分けることができる(図表 1)。



親睦と修養とが『黎明』の担つた唯一の使命である。(1 (1) 表紙裏面、資料番号 [R\\_00002](#))

『黎明』は、中村古峠診療所・療養所の患者たちが自主的に設立した「黎明修養会」によって、退寮者も含めた療養者同士のつながりを維持・発展させるための雑誌として始められたものであった。役職一覧では古峠は「顧問」とされており、雑誌の編集は服部清五郎（もとは中村家の書生で、『変態心理』記者。当時は療養所の作業部主任）が中心となって担当していたようだ。

近代の療養施設においては、患者らが中心となって院内誌が編集・刊行されることはそれほど珍しいことではない。「いのちの初夜」(1936(昭和11))の作者・北条民雄も参加していたことで知られる文芸誌『山桜』(1919(大正8)年創刊)が刊行されていたのは、ハンセン病療養所の全生病院であったし、また各地の結核療養所でも戦前から様々な雑誌が療養所内で刊行されていたようだ<sup>12</sup>。『黎明』もまた、こうした療養所雑誌の文化を引き継いだものだったといえるだろう。

では、誌面にはどのような記事が掲載されていたのだろうか。前期本誌の主要な欄を挙げておこう。

- ・「講話」…古峠による精神医学に関する談話や評論などを掲載。
- ・「感想」…療養日誌の一部や、退寮後の療養回顧録などを掲載。
- ・「文苑」…短歌、俳句が中心。随想や小説が掲載されることもある。
- ・「通信」…編集部や古峠宛に届いた手紙の文面を紹介。
- ・「道修山日記抄」…院長動向や作業内容など、診療所の毎日の出来事を箇条書きでごく簡単に記載。業務日誌の抄録とみられる。
- ・「会費領収報告」…会費振込者の氏名掲示。
- ・「千葉寺便り」「編輯室だより」…編集後記。編集者が担当。

これらに加えて一時期ではあるが、医師であった古峠の息子たちが、それぞれの専門領域の話題を叙述する記事（中村哲「生理瑣談」7 (2) – 11 (12) ?<sup>13</sup>、中村寛「神経質に就いて」9 (11)、同「ヒステリー状態」10 (8・9) – (10)）が断続的に連載されている。また、不定期ではあるが、療養所の行事を参加者たちが報告する「興趣」欄や、塚原肅「千葉県下に於ける犯罪統計」(2 (3・4・5) – (9・10)) のような療養所スタッフによる記事も確認することができる。

療養所の活動に関する情報を軸としながらも、雑多な内容が展開されていた前期『黎明』だったが、大きく分ければ三つの面があったと考えられる。

まず一つ目が《会員同士の親睦・連絡機関としての一面》である。

『黎明』何時も面白く拝見致して居ります。昨夏御入寮の皆様は、其の後どう遊ばし

ましたかと常に気には懸りながらも、皆様の御通信が誌上に見えませんので淋しく存じて居ります。（「育児を日課として」1 (8) p.179、資料番号 [R\\_00187](#)）

先日は「黎明」お送り下され、誠に有難く御礼申上げます。先生の御講話は、何時もあの思ひ出深き竹林寮のお室で伺ふやうな気持で読ませて頂いて居ります。尚皆様の御消息、日記、殊に八年夏組の方のお名前を拝見するさへ懐かしき限りであります。〔通信〕2 (6・7・8) p.141、資料番号 [R\\_00364](#)）

会員たちからの通信の多くは、このようなたわいもない挨拶にすぎないが、彼らが寮生活へのノスタルジアを土台とし、療養所のコミュニティとの心的つながりを維持している様子がうかがわれよう。「お名前を拝見するさへ懐かしき限り」とあるように、投書者もそれを読む読者も、通信の内容そのものは、さほど重視していない。自分の名前が載ること、あるいは同期の療養者や古峡の名前を確認すること自体に意味があったのだろう。誌上に通信欄を開き続けた前期『黎明』は、会員間の地理的・時間的な隔たりを越える、安定した〈ハブ〉として機能していたのである。

そして二つ目の面は、《中村古峡診療所・療養所の〈紀要〉として的一面》である。

前期本誌には、古峡の評論と呼べるもののが「講話」欄を中心に確認できるだけでも 41 本<sup>14</sup>掲載されている。はじめのうちは、「不眠に悩む人々に」(1 (5))、「新入寮者諸君に」(2 (3・4・5) – (6・7・8)) など、療養所で開催された講話会での話に基づいたとみられる、療養者に向けた実践的な知識を伝達する談話形式の評論も多い。それが前期の後半ともなると、次第に「精神分裂病に就いて」(9 (4) – (11))、「無意識論」(10 (8・9) ?–11 (12) ?) といった、精神医学の学術論文を思わせるタイプの評論に切り替わっていくようになる。7 卷途中からは古峡の息子たちの専門性の高い文章も頻繁に掲載されるようになっており、前期後半の古峡評論の変化はこうした流れを引き継いだものとも考えられよう。

このように『黎明』に掲載される評論は、巻号を重ねるにしたがって療養者たちを啓蒙するという方向性が弱まり、専門的なものへと移行していく。結果として、前期本誌は研究機関の研究成果を定期的に発表する雑誌、いわゆる〈紀要〉のような役割をも担うようになっていたのである。

「黎明修養会設立趣意書」では「お互ひの親睦と修養とが『黎明』の担つた唯一の使命」と述べられていたが、一つ目の面が会員たちの「親睦」を、二つ目の面が「修養」を支えていたといえるかもしれない。ただし、会員たちの「修養」と最も強く結びついていたのは、三つ目の面、《古峡療法への〈信仰〉を共有する場として的一面》であった。

## II. 全治体験録を書き綴るということ

### — 古峡療法への〈信仰〉を共有する場

#### 類型化した物語としての全治体験録

三つ目の面が分かりやすい形で見てとれるのは、『黎明』のメインコンテンツのひとつだった全治体験録である。療養所で書かれた療養日誌の抄録を主に掲載していた「感想」欄が「発病より全治まで」(9(4)以降は「発病から全治まで」)と改題され、基本的には療養者が退寮前後に書いた全治体験録を掲載する形式に変更されたのは、1936(昭和 11)年(3(10)?)からだった。

以後の議論とも関わるため、ここで簡単に中村古峡療養所で実施されていた独自の治療システムについて触れておきたい。療養所では、8週間を治療期間の基本とし、第1週目「絶対安静期」、第2週目「準備作業期」(軽度の作業訓練)、第3~6週目「正規作業期」(本格的作業訓練)、第7・8週目「自治生活期」といった段階が設けられていた<sup>15</sup>。実施にあたっては、症状が安定するまでは第三寮と呼ばれる隔離病棟に入り、症状が安定したのちに開放病棟にあたる第一寮または第二寮へと移動する制度が基本となっていたようだ。

古峡療法の療養者が自らの治療経験を綴った「体験録」は、古峡の著書『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』(主婦之友社 1933)などでも確認できる。この段階では療養者が書いた療養日誌の抄録が「体験録」とされているのだが、『黎明』の「発病より全治まで」欄には、療養日誌そのものではなく、全治退寮者が現在の視点から自らの回復の道程を振り返る形式で綴った文章が掲載されている。

以前から療養所では、全治退寮者の送別会も兼ねた談話会で、古峡または退寮者本人が回復に至った経緯を紹介するのが恒例となっていたが<sup>16</sup>、次第に全治体験録という文章のかたちで提出することが慣習化されていったものと推察される。それは「先生の云はれる如く、千葉寺の生活に於ける一つの卒業論文」([通信] 11 (3) p.76、資料番号 [R\\_00812](#))となっていたのである。

確認できるだけでも、前期『黎明』には 71 本もの全治体験録が掲載されている<sup>17</sup>。一本一本がそれなりの長さを持った文章であり、全文を紹介することは叶わないが、そのうちから一つ、「赤面恐怖の開悟」の梗概を紹介しておこう。

自分は 16 歳の頃から「頬が赤くて子供っぽい」ことに劣等感を抱いていたが、18 歳の頃には赤面恐怖症、さらに翌年には会食恐怖症を発症してしまった。「中村先生の著作」を手に入れたおかげで、学校はなんとか卒業することができたが、このままではとても進学できないと考え、ついに療養所に入寮することになった。

作業訓練等を経て回復したと過信した自分は一度退寮したものの、すぐに再発。ふたたび入寮することになる。今度はより主体的に治療に取り組み、赤面してもかまわず会食に挑んだり、中村先生の「全治者体験録」などを精読したりといった努力を重ねた。結果、「次ぎ次ぎに恐怖に飛込んで解脱する精神力」を身につけることができ、自信を持って退寮した次第である。長い間の中村先生のご指導に深い感謝を捧げたい。(9 (4) p.61-65 を梗概化、資料番号 [R\\_00624](#))

この体験録の書き手は男子学生だったが、「発病より全治まで」欄には性別・年齢・職業・症状を異にする様々な書き手が確認できる。それゆえ一見すると多様な内容が書かれているようにみえるこれら体験録だが、分析を進めていくと興味深い事実に気付かされる。そのほとんどが次のような一定の語りの類型（プロット）のなかに収まっているのだ。

- 1、自身の性質も含む、神経症発症に至るまでの経緯の説明
- 2、発症後の苦悩、迷走
- 3、古峠を著作等で知り、診療所へ入寮
- (4、入寮後の作業療法への不安、不信。作業の挫折)
- 5、作業の効果を実感、症状からの回復
- 6、謝辞

当然、全ての体験録がこれらの要素を完備しているわけではない。文章量の少ない体験録などでは、特に4番目の要素などは省略されがちである。それでも全体の傾向としては、このプロットに従っているとみてよい。では、なぜ多くの体験録は、類型化した物語となってしまったのだろうか。

#### 〈読む／書く〉サイクル

理由としてまず挙げられるのは、体験録の書き手のほとんどが、かつてはその読み手であったということだ。編集後記をみると「本誌本号に採録したる全治体験録三篇は揃ひも揃つて見事なる出来栄えであり、「他の療養者の好模範たるを失はぬ。特に新入寮者諸君の精読を御勧めしたい」(11 (1) p.27、資料番号 [R\\_00765](#)) と、それを「精読」し「模範」とすることが推奨されていた。

実際、同時期の体験録に書かれた「数々の治癒された先輩の方々が述べられた如く、自分も当寮の規則を守り、日々作業に専心する事が症状の治癒を必ず結果すると想ひます」(「苦脱新生」11 (12) p.283、資料番号 [R\\_01000](#)) といった述懐からは、書き手が「数々の治癒された先輩の方々」と表現できるほど、多数の回復事例の情報に触れていたことがうかがわれる。そのうちには、対面のコミュニケーションのみならず、先輩たちの残した体験録の一群を

「精読」することも含まれていたであろう。「模範」を求めて体験録を真摯に読み込んでいた読み手たちが、今度は書き手に転じていくのである。先行するテクストと類似していったとしても不思議はないだろう。

ただし、全治体験録の書き手たちが〈読む人々〉でもあったことの影響は、単に書き方のレベルにとどまるものではない。彼らのものの捉え方もまた、読むことを通じて一定の方向に整えられていく。例えばそれは、「性格異常は、天から与へられた一の試練である。只管仕事に精出す事の重大さを教へて呉れる」（「私の療養日誌」7 (2) p.51、資料番号 [R\\_00580](#)）や「神経質も本態を把握しますと、却つて有ることが新しき性格の創造、拡張を実現する為めに必要です」（「冬来りなば」9 (5) p.81、資料番号 [R\\_00633](#)）といった記述にみられるような、《神経質への感謝・肯定》といったかたちで表れてくる。

「神経質」とは、内向的素質が働きすぎ過敏となることで、杞憂観念や劣等感に支配されてしまっている状態、またはそのような傾向を帯びた気質そのものを指す用語である（中村古峠『神経衰弱はどうすれば全治するか』主婦之友社 1930）。今の自分の苦しみの直接的な原因となっている神経質に感謝して肯定しようというのはいささか突飛にもみえるのだが、こうした考え方方が療養者たちに共有されていたのは、古峠の「神経質療法の一般法則」の教えがあったからであろう。彼の著書（同前）では、「第一則 病的な完全欲を去れ」から始まる一二の規則が提示されているが、その第一二則として挙げられているのが「感謝の心を以て生活せよ」である。

すべての人間の素質の中で、神経質ほど恵まれてゐる素質は、他にないであります。たゞこれが、本人の心の持方一つによつて、大なる仕事の柱石ともなれば、反対に、一身を滅ぼす獅子身中の虫ともなるのであります。だから、神経質の人々は、常に自分自身の気質に感謝し、自重自愛して、その恵まれたる素質の長所を發揮するやうに心掛けねばなりません。（pp.341-342）

体験録プロットの3《古峠を著作等で知り、診療所へ入寮》に示されているように、書き手たちの多くが古峠の著書や『主婦之友』での掲載記事などの読者でもあった。彼らはその読書から「神経質ほど恵まれてゐる素質は、他にない」こと、「その恵まれたる素質の長所を發揮するやうに心掛け」るべきことを学んでいく。

重要なのはそのような思想が、神経質とは「新しき性格の創造、拡張を実現する為めに必要」なものであるといった、療養者個人の言葉に置き換えられながらも、体験録へと書き残されていくということだ。それらは後輩療養者たちに「模範」として「精読」されることで、次の代へと引き継がれていくことになるだろう。もちろん、療養者たちには療養所の講話会など、古峠から直接口頭で思想を伝えられる機会も設けられていた。そのような機会に加えて、彼らの生活はすでに、古峠の著作や療養者たちの体験録といった古峠療法に由来する思

想をはらんだ多くのテクストに取り囲まれており、それを〈読む／書く〉サイクルのなかに自ずと置かれていたのである。

### 書き綴ることを通じた自己の〈調律〉

先行する諸テクストが示す枠組みを、繰り返し参照しつつ自身の経験を書き綴っていくこと。それは書き手となる療養者たちにとって、どのような効果や意味があったのだろうか。この問題を考える手がかりとして、『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』に掲載された、ある大学生の療養日誌の一節をみておきたい。

私は或るちよつとした悟りごとでもすると、日記を書いてゐるうちに、そのことを幾倍にも拡大して書いてしまふ。又私には、さうして書いてゐるうちに、よしそれが本当の自分の心よりも相当隔りがあるやうに思へることでも、さう書いてしまふと、少くとも翌日かその文翌日には、自ら何だかそんな気がして来るのだ。(評に曰く [=日誌に書き込まれた古峠の朱記であることを意味する]、然り、それが又自己を向上発展させるための、最もよき自己暗示法でもあるのだ。) [中略] 私の日記は、自分の本当の姿とはまだ少しの隔りはあると思ふ。無理にそんな隔りを作つて、お賞めの言葉を貰はうとするのではないが、私はとにかく幾分無理を推しても、さうした不快な心を制する言葉を書列ねるうちに、やがて心が鎮まつて来るのだ。(「八年間の正視恐怖症、不眠症其他を五週間の訓練で全治した体験記」(中村前掲書(1933) p.179 傍点本文)

ここには、日誌に記した理想的な自己像と実際の自分との「隔り」が、「言葉を書列ねるうちに」乗り越えられていくという経験が語られている。それが奏功したのか、彼は日誌を日々書き継いでいくなかで、次第に神経質ゆえの苦しみさえも、「普通人以上の修養を成し得」る契機を与えてくれた「神の試練と思つて感謝」するようになっていく。この記述に対して古峠は、「神経質ほど恵まれてゐる気質は他にない」と同意を示し、「拙著『神経衰弱はどうすれば全治するか』第八章、一般法則第一二則 [=本論既出の「感謝の心を以て生活せよ」] 参照のこと」と朱記している(同前 pp.189-190)。大学生にとってこうした古峠の言葉は、自分が歩みつつある道が誤りではないこと、そしてこれから進むべき方向を教えてくれる、かけがいのないものであったと考えられる。

療養日誌を舞台として大学生が行っていたのは、いかなれば書き綴ることを通じた自己の〈調律〉であったといえるだろう。古峠という依拠すべき存在から発せられる言葉=〈基準音〉を参照しながら自らを書き綴り、少しづつ目標とする自己イメージへと合わせていったのである。

先に確認してきたいいくつかの文面、例えば《神経質への感謝・肯定》の内面化に至った療養者たちの姿からは、『黎明』に全治体験録を書き綴ることにおいても、同じく自己の〈調律〉と呼べるような営みが行われていたことがうかがわれる。ただし、こちらは療養

日誌における大学生の営みよりも、いくぶんシンプルである。大学生は自身の日誌に朱記される古峡の言葉に反応しながら、日々新たに自分の言葉を紡いでいかなければならなかつた。いわば〈対話〉のやり取りのなかで、その都度、自己を〈調律〉していったのである。対して、全治体験録の書き手が行うのは、基本的には先行する体験録がすでに提示してくれているプロットに、自らの経験を当てはめていくというパターン化された営みであったといえる。

彼らも療養生活中には日誌を必ず書かされており、大学生と同じような試行錯誤をすでに経てきたのかもしれない。だが、全治体験録を書く際には、そのような個別の試行錯誤は既存のプロットに当てはまる範囲に整序され、〈苦悶を乗り越え「全治」へと至った私〉というわかりやすい物語のなかに綺麗に収まってしまうことになる。

実際、療養日誌をみていくと、このわかりやすい物語に対する違和感が患者の側から語られていたりもする（資料番号 [025\\_006](#)）。作業訓練を続けながらも回復への確信が持てず、不安のなかで先輩たちの全治体験録を読み進めてきたこの男性患者は、「全治者の日記は何だか旨い具合に訂正又は拵えてあるやうな気がしてなりません」と自らの心境を吐露している（1941（昭和16）.3.13）。体験録で語られている「全治」は、周囲の患者たちの様子を見る限り、リアリティに欠けていると感じたのであろう。それに対して古峡は「学校の卒業者は皆満点ばかり揃つてゐると君は思つてゐるか？」「君は単純な神経質だけではないらしい。とてもとても人一倍疑惑心の深い症状である」と朱記し、その不心得を嗜めているが、「拵えてある」のではないかという患者が抱いた疑問に対する直接的な返答にはなっていないことは明らかだろう。このやり取りが示すように、全治体験録は実態をそのまま反映したものというより、やはり既存の枠のなかで理想像を描いていく一種の物語だったと考えた方が妥当であるようだ。

それは回復した自分という新たなアイデンティティを、物語を通じて確立する技法または儀式ともいえ、治療法のひとつとしてみると一概に否定すべきものでもない。しかし、それが時間を経て制度化されていくに従って、次第に体験録を書くこと自体がある種の規範として機能するものになっていったことには注意しなければならない。

### 糾弾される〈異端〉

1943（昭和18）年9月の『黎明』（10（8・9））の編集後記には、近頃の療養所の雰囲気に苦言を呈する言葉が並んでいる。

先輩も後輩も一様にだれ気味で、日々の作業日誌や感想を真面目に書いてゐるものはホンの二三名に過ぎず、況して退寮の際「体験録」を書きのこして行く殊勝な心掛のものは只の一人もなく、最近の講話会に於ても院長先生をして「今年夏季の如き寮生の不成績は当療養所開設以来最初のことなり」との嘆声を発せしめたとは誠に心細

い。(p.253、資料番号 [R\\_00713](#))

『黎明』の「発病より全治まで」欄が開設されてから7年が経ち、全治体験録も安定して誌面に掲載されていたのだが、体験録を書き残していくという療養所のシステムは、時に機能不全を起こしていたようである。見逃せないのは、そのような状態に対して、編集者から怒りすら感じられる強い非難がなされているという点だ。

実はこの前年(1942(昭和17))にも、『黎明』誌上で感情的ともいえる非難が巻き起こった事件が勃発している。きっかけは「T」(□□□一(患者No00270))という退寮者が執筆した体験録「逆流に棹して」(9(6))が掲載されたことだった。残念ながら当該号が資料群のなかに残されていないため、「T」が具体的にどう書いているのかは確認できない。だが、翌号に療養者三名の連名で投稿された批判文「T君の体験記を読みて」(9(7))によつて、ポイントとなりそうな内容はおおよそ知ることができる(資料番号 [R\\_00648](#))。

批判文では、「君は規律云々と書いて居るが、各室に掲げられた戒を破つて雑談を最も多くしてゐたものは君自身ではなかつたか」とい、さらに「君は先輩が方向を教へてくれたなかつたと非難して居るが、一体君は誰を頼つて入寮して來たのか。患者の指導を受けに來たのか。又君は、他の寮友が毎晩熱心に日誌を書いて院長の指導を仰いで居るに拘はらず、君は一週に一度でも日誌の感想欄を書いて出した事があるか」と、難詰している(p.123)。

最後、この批判文は「君は此の「黎明」なる雑誌は、北は樺太、南は台湾、西は朝鮮満州支那に渡つて普 <sup>々々々</sup> く黎明修養会会員諸君に配布されることを既に御承知の事と思ふ。この公然と社会に発表さるゝ貴き誌上に、かくも誇張した悪宣伝に近き一文を寄せて、省みて自ら恥かしいとは思はないか。願はくは一日も早く共感・感謝・謙讓・平和の眞の全治の心境に到達し、須く其の非を悟られんことを切に念願するものである」(同頁)と閉じられるが、以上の引用箇所には、療養者たちが「T」を許せなかつた理由がよく示されている。

それは大きく三つに分けられるだろう。一つ目は、「T」の主張と療養者たちが知る彼の実態とが、明らかに乖離していたこと。二つ目は、「T」が古峠の療法で重視された療養日誌に、真剣に取り組んでいなかつたこと。そして三つ目が、会員(現・元療養者たち)が心の拠り所とする療養所のイメージを毀損するような言説を、よりによって『黎明』という彼らの共同体の基盤を用いて流布させたことである。

療養者たちの非難が正鵠を射ているのか、あるいは「T」の〈告発〉が事実なのか、資料に限りのある現代の我々にはそれを審判する術はない。一方で、療養者たちの批判文のうちにも、先に挙げた編集者の非難と同様の感情的な反発が、色濃く現れているのは間違いないだろう。そこには共通して、規範から逸脱する者たちを否定・排除したいという、強い欲望が滲み出ているようにみえる。

ここまで議論を踏まえるならば、『黎明』における全治体験録が持ち得た、単なる治療技法にとどまらない、もうひとつの意義がはっきりとみえてくる。

全治体験録とは、古峡療法の成功例であり、物語として類型化されたプロットに沿って書き綴られたものであった。当然ながら、そこには新たな発見や理論的展開は、ほぼ見受けられない。反復されるのみで進歩が欠如しているともいえるのだが、考えようによつては、そのようなものはあったところで困るものだったのかもしれない。

なぜなら、体験録で大切なのは、先輩たちや自身が行ってきた古峡療法の正しさを証明することであり、同時にそれに救われたということを書き綴ることで、書き手の「全治」を完了させることだったからだ。ここに垣間見えるのは、体験録の「おかげ話（靈験譚）」的側面である。「神への熱心な信仰によって医者からも見放された難病が完治した」といった「おかげ話」においては、奇跡的出来事を語ることで、神の力の証明と同時に、その神に対する自らの信心が正しいことの証明がパフォーマティヴなかたちでなされていく。もしそこに〈新たな発見や理論的展開〉などがあったとすれば、かえって絶対的であるはずのこれまでの〈教え〉そのものへの疑いを生じさせかねない危うさがはらまれてしまうだろう<sup>18</sup>。

こうした視点からみるならば、前期『黎明』でメインコンテンツとしての役割を担った「発病より全治まで」欄が、同型の体験録を読む／書き綴ることを通じ、繰り返し古峡療法に対する〈信仰〉を確認し合う場でもあったことがはっきりとしてくる。会員たちは、『黎明』という場を活用することで、古峡個人の直接的な指導がなくとも、自律的に〈信仰〉を高め合うシステムを構築していたのである。だからこそ、その〈信仰〉のシステムを侵犯しかねない者、例えば体験録を書かない者や療養所批判等の既成の型から外れた記述を行う者は、〈異端〉として排除されなければならなかつたのだ。

### III. 後期『黎明』 — 模索される共同体の再構築

アジア太平洋戦争末期から敗戦直後の混乱を経て、『黎明』の刊行が再開されたのは1947年1月（13（1））であった。再開号の冒頭に置かれた古峡による「巻頭言」では、次のような宣言が行われている。

[軍部は]「戦争は進歩の母」などと独りよがりの諧謔を吐いて、国民の口を塞ぎ、耳を覆ひ、目を盲にし、自己と少しでも歩調を異にする者あらば、直ちに国賊非国民呼はりを敢てし、勝手気儘の横暴を逞うした。[中略] 彼等は自己の権勢欲に眼眩める、最も無軌道没常識な精神異常者であつた。[中略] 前日の愚を再び繰返したりしないやう、国民各自が互に相戒め、相助け合ひ、且つは精神衛生を能く守つて、精神異常者

の言動に捲込まれないやう、注意に注意をして行かなければならぬ。蓋し今日ほど精神衛生の重要性が痛感せらるゝ時はないであらう。これ本誌が爰に従来の狭き会員組織制を改め、面目を一新して全国民に公開し、共に俱に健全精神を常持して、民主日本、文化日本の建設に寄与せんことを大いに期する所以である。(p.1、[R\\_01017](#))

戦中には『黎明』誌上でも、「吾等一億国民はこの大戦果〔=当初、日本軍勝利と伝えられたレイテ沖海戦〕に酔ふことなく、愈々勇往邁進職域奉公の誠を致し、大東亜戦争最後の決戦に勝ち抜かねばならない」(「編輯室だより」11 (11) p.272、資料番号 [R\\_00994](#)) といった戦争協力を鼓舞する言葉が踊っていたのだが、それを忘却したかのような強い口調の軍部批判である。また「巻頭言」では、今号からは「従来の狭き会員組織制を改め、面目を一新して全国民に公開」とあるように、一般販売される「公衆雑誌」とすることがうたわれ、本誌は以後、古峡を名実ともに責任者として運営が進められていくことになる。

この転換は、主要な欄にどのような変化をもたらしたのだろうか。まとめれば次の通りである。

#### 【前期からの流れを汲む欄】

- ・「講話」…欄名は消えるが、評論記事は継続して掲載。
- ・「発病より全治まで」…「全治者体験録」に改題。
- ・「通信」…「通信一束」に改題。不定期掲載となり、分量は一頁の半分程度に縮小。
- ・「千葉寺便り」…前期から引き続き、編集スタッフの高原正也が担当。
- ・その他…不定期でスタッフのエッセイなどが掲載。

#### 【後期から新たに開始された欄】

- ・相談応答欄 (「精神衛生相談室」13 (1) ~、「青年と性的神経衰弱」13 (11) ~、「対人恐怖、赤面恐怖の全治法」14 (9))

…相談料 10 円 (14 (2) からは 20 円) で一般読者からの相談書簡を受け付ける。そのうちの一部を誌面に掲載。「青年と性的神経衰弱」は当初、古峡の評論を掲載していたが、「愛読者が非常に多数と見えて、続々質問の書信が山積して居る状況を受けて (「千葉寺だより」13 (11) p.152、資料番号 [R\\_01097](#))、第 4 回からは性的神経衰弱に関連する質問とそれへの回答を専門に扱う欄に切り替わる。なお、「精神衛生相談室」も並行して継続。

前期からの流れを汲む欄も少なからず変更を受けており、前期『黎明』の三つの面のうち、一つ目の《会員同士の親睦・連絡機関としての一面》は弱まり、二つ目の《中村古峡診療所・療養所の〈紀要〉としての一面》は継続されるが、一般読者に向けた啓蒙的な方

向性が強くなったといえるだろう。

では、残された三つ目の《古峡療法への〈信仰〉を共有する場としての一面》は、どうだろうか。後期から新たに開設された「精神衛生相談室」をみてみると、古峡と相談者との次のようなやり取りが目にとまる。

小生が本誌第一号から第七号に亘り連載し来つた「神経質の療法」並びに拙著「神経衰弱の正体」第二篇第四章に述べておいた「神経質の療法」を繰返し熟読せられて、その性格改造に努力精進せられんことを祈ります。(「この心の悩みを如何にすべきか」13 (9) p.115、資料番号 [R\\_01078](#))

K・M・君よ、先づ氣を落ち着けて、もう一度ゆつくりと余の「青年と性的神経衰弱」の一文を読め。君の悩んでゐる幾多の症状や煩悶は、決して君の過去の自流の結果ではなくして、全部が君の神経質の産物であることが理解されるでせう。(「過去の自流行為を慚ぢて懊惱」13 (12) p.169、資料番号 [R\\_01103](#))

一見してわかるように、古峡の回答には自著を参照するよう指示する記述が頻繁にあらわれてくる。ただ、相談者たちの関連テクストを読む習慣の欠如には、この時期特有の事情も関わっていたと考えられる。1945年5月に古峡の品川の邸宅と診療所が空襲を受けて全焼し、在庫があらかた焼失してしまったことで、彼の著書の希少化が進んでいたのである。『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』などは、古書店で「二百円以上といふ箇棒な値段」(14 (3) p.36、資料番号 [R\\_01139](#))となっていたらしい。古峡の著作や前期『黎明』を通じて蓄積されてきた体験録だったが、療養所外の読者にはなかなか触れ難いものになってしまっていたのである。加えて、そこに今回の「公衆雑誌」化による外部の新規読者の大幅な増加が重なった結果、先ほどのような古峡とのやり取りが引き起こされるに至ったというわけだ。前期『黎明』でみられたような、先行テクストを活用して〈調律〉を行っていくシステムが、そもそも成立し難い状況が生まれていたのである。

古峡も、ただ手をこまねいていたわけではない。『黎明』再開直後から、絶版状態だった旧著『神経衰弱はどうすれば全治するか』に載せられていた〈神経質療法の一般法則〉を連載し<sup>19</sup>、新規読者への啓蒙を意識した誌面作りをおこなっている (13 (1) – (7))。また、神経衰弱研究の新基軸を大胆に打ち出したとする『神経衰弱の正体』(羽田書店 1947) や、10名の「強迫観念全治者体験録」を所収した『強迫観念の全治法』(人文書院 1948) といった新著を続けて刊行しており<sup>20</sup>、積極的に自らの理論と療法への理解を広めていくとする姿勢もうかがわれる。

果たして古峡の努力は報われたのだろうか。『黎明』再開後、1年半を経過した時点の相談応答欄「青年と性的神経衰弱」(14 (6)) をみてみよう。

あなたもまだ本誌は一度も見て居られないやうですね。あなたの悩んで居られる性器短小や早漏の問題は、既に本誌の「青年と性的神経衰弱」の中で、詳しく説明しておきました。(pp.87-88、資料番号 [R\\_01164](#))

あなたは新聞広告を見ただけで、まだ本誌の一冊も手にすることなく、慌てふためいてこの長文の手紙を寄せられました。成程「溺るゝ者は藁をも掴む思ひ」で焦り藻搔いて居られる心事はお氣の毒にも察せられますが、さて二十年間も悩み悩んだ揚句、今更また藁を掴んでどう為さらうとするお考へですか。(pp.89-90、資料番号 [R\\_01164](#))

当号の本欄回答は全て、質問者が既刊の本誌や古峡の著作を読まないまま投稿してきたことへの苦情から始まる。その書き振りからは、言葉遣いこそ丁寧だが、明らかに苛立っていることが伝わってくるだろう。どうやら古峡は、後期『黎明』誌上においては、以前の自律的な〈信仰〉共同体を再構築することに苦戦し続けたようである。

### おわりに

最後に、『黎明』の終刊とその後について触れておこう。前期『黎明』の先行テクストを用いた「全治」システムがリセットされたことは、古峡にとって損失だったことは間違いない。だが一方で、後期『黎明』には新規読者たちを惹き付けた相談応答欄をはじめとして、いくつかの新しい試みもスタートしつつあった。外部へと今まで以上に開かれることで、『黎明』のみならず古峡の精神療法もまた新しいステージに進む可能性がそこにはあったように思われる。

ところが、これからというところで古峡が「頓に心身の健康を害し、到底従来の劇務に堪へ得ざるに至りたるため」(「廃刊の辞」14 (9) p.146、資料番号 [R\\_01180](#))、1948年9月に、およそ14年にわたるその歴史の幕を下ろすことになった。同年の古峡日記には、8月頃から「アムネジア」(健忘症)の症状に悩まされていることがしばしば書き残されており、実際に体調は芳しくなかったようである。以後、古峡の関心の中心は悲願であった中村古峡全集の刊行へと向けていくことになるのだが、資金繰りの問題に加え、脳溢血や脳動脈硬化症の発症といった本人の体調悪化もあり、その夢は最後まで叶うこととはなかった。

『黎明』終刊後の中村古峡療養所は、中村病院への改称(1949)や古峡の死去(1952)を経て、変革の時期を迎えていく。その渦中にあった1953(昭和28)年12月に、開放棟の患者有志たちによって創刊されたのが「県下唯一の精神病院の患者新聞」である『開放新聞』だった<sup>21</sup>。資料群のなかに紛れ込むようにして残されていた4部(13・17・18・21号)

は、『黎明』のような活版印刷ではなくガリ版刷りとなっている。サイズは、およそB4で両面印刷が多いがB4タブ(272mm×382mm)程度の用紙を二つ折り四面とするもの(13号)もあり、ばらつきがみられる<sup>22</sup>。

『黎明』と比べると、印刷物としての質も、記事の分量も劣っていたことは否めない。ただし、紙面(21号)には院内イベント告知(「会と催し」)、退院者の現状報告(「なつかしいOBだより」)、編集者からの提言(「共同作業について」)、外部からの来信紹介(松沢病院医長・江副勉より)、読者からの投書(「読者の声」)、患者たちの自作俳句(「俳壇」)等々が掲載され、少しでも読みがいのあるものにしようとする編集担当者たちの意気込みが感じられる。

当時は、ちょうど中村病院でもコントミン(クロルプロマジン)の使用が始まり、「戦前型治療の時代」から「向精神薬の時代」への端境期にあたっていた<sup>23</sup>。精神医療のパラダイムが大きく変容しつつある中で刊行された『開放新聞』には、もう以前の『黎明』が担っていたようなレベルの治療的役割が与えられることはなかった。主として残されたのは、退院者たちも広く含む、中村病院の仲間たちのつながりの基盤としての役割だったのである。良くも悪くも『開放新聞』は、小さなコミュニティにおける〈普通〉の定期刊行物となっていたといえそうだ。

してみると、一医療機関の所内で編集されていたメディアにすぎない『黎明』が、あれほど多面性と高い熱量を誌上で維持し続けていたのが、いかに特異なことだったかがうかがわれる。それは、古峡という人物と療法の独自性、その可能性に引き寄せられた患者たちの想い、そして治療法の未確立や患者への差別視など多くの問題点を抱えていた同時代の心の病をめぐる医学的・社会的環境などが、複雑に絡み合うなかで生み出されてきたものだったのだろう。

近年、歴史学の領域を中心として、エゴ・ドキュメント研究という新たな潮流が注目を集めている。エゴ・ドキュメント、すなわち一人称で語られた手紙・日記・自叙伝、あるいは法廷で強いられた自己の証言といったものまでを含む〈自らについて語る〉様々な資料はこれまで、主観に偏り十分な客觀性が保証できないものとされてきた。だが見方を変えれば、偏りがあるからこそ「語り手の視点から外側の世界をみる手段」となり得る。それは既存の歴史学が看過してきたような、人々の「記憶・感情・欲望・知識・意味などの主觀性を考察しうるという利点」を持ち、さらには語る主体を構築する「複雑な社会的・歴史的過程」を逆照射する手がかりともなるという<sup>24</sup>。

思えば、『黎明』がメインコンテンツとしてきたのは、全治体験録や投書をはじめとする、患者たちが〈自らについて語る〉文章であった。全治体験録の例をみてもわかるように、それは決して〈ありのままの自分〉がそのまま語られているものではなく、様々な規範や思惑が影響するなかで形作られていた。しかし、そうした歪みがあるからこそ、語り手自身の欲望やそれを取り巻く当時の権力関係を総体的に検討するための材料となり得るのではないだろうか。

今回のデータベースには、『黎明』の刊行と重なる時期の療養日誌が収録されている。いうまでもなく、療養日誌などはエゴ・ドキュメントそのものであろう。『黎明』と療養日誌という、近代日本の精神医療の周辺で紡がれていた貴重なエゴ・ドキュメントの集積に容易にアクセス可能となったことは、我々が今まで感知できず見過ごされてきた人々の生と向かい合う好機を与えられたということでもある。このデータベースが、精神医学史や心理学史、さらには歴史学や文学といった多様な領域における新たな研究の進展に寄与することを願っている。

#### 付記および謝辞

- ・本稿は、拙稿「雑誌『黎明』を読む」(『愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要』11 2024.3)の前半部を中心に、その後の調査成果を踏まえた加筆・修正を加え、再構成を施したものである。
- ・本稿引用では、旧漢字は適宜新漢字に改め、仮名遣いは本文のままとしている。また、踊り字のうち「くの字点」は省略された文字に置き換えた。なお、引用文中の傍線は引用者によるものであり、〔 〕内は引用者による注である。
- ・史料調査にご協力いただいた医療法人グリーンエミネンス 中村古峠記念病院に感謝申し上げる。
- ・本研究の一部は、JSPS 科研費 JP19H01234 の助成を受けたものである。

#### 注

---

<sup>1</sup> 大正期の出版メディアでは、「変態性欲」や「変態心理」を冠する書籍や記事が続々と登場し、さらにはマゾヒズムを主題とする谷崎潤一郎の文学などの登場も相まって、〈変態〉という概念に対して知識階級を中心に人々の注目が集まっていた。近代日本の〈変態〉をめぐる文化史の詳細については、拙書『「変態」という文化』(ひつじ書房 2014)ならびに、竹内瑞穂+「メタモ研究会」(編著)『〈変態〉二十面相』(六花出版 2016)を参照のこと。

<sup>2</sup> 1917(大正 6)年に古峠が自宅の一角で始めた日本精神医学会診療部を母体とし、1927(昭和 2)年に日本精神医学会診療所として開設。『黎明』創刊時には中村古峠診療所と呼称されている。1945 年に空襲で全焼。

<sup>3</sup> 中村民男「はじめに」(『中村古峠と黎明』医療法人グリーンエミネンス 1997)p.7

<sup>4</sup> この資料群の研究に先鞭をつけたのは、曾根博義であった。1990 年代から整理に携わり、『変態心理』誌の復刻(1998)、療養所に入院していた中原中也の新資料の発掘(1999)、『変態心理』誌を主題とした論集(小田晋(他)編『「変態心理」と中村古峠』(不二出版 2001))の刊行などが行われ、文学研究領域を超えて反響を呼び起した。また、回覧雑誌『タづ』についても、教え子たちとともに翻刻も行っている(日本大学大学院文学研究科『タづ』翻刻の会[編]「翻刻・註釈・解題『タづ』第 3 号」(日本大学大学院文学研究科曾根博義研究室 2004)、「翻刻・註釈・解題『タづ』第4号」(同研究室 2005))。

2016 年の曾根の逝去とともに調査が停止していたが、文学／心理学史／精神医学史の研究者が集い、領域横断的に協働しながら近・現代の〈変態〉をめぐる文化の研究に取り組んできた「メタモ研究会」(2004 年発足。曾根もメンバーの一人であった)が、彼の遺志を継ぐかたちで資料群の整理と研究を進めてきた。

<sup>5</sup> 基本的には古峡によって点検および朱記の書き入れがされているが、1941(昭和 16)年以降の日誌では、しばしば患者の作業訓練の責任者であった中島作業部長が朱記を担当しているケースがみられる。記入者の判別については、古峡の朱記では平仮名「な」の表記に、主として変体仮名「ふ」が用いられている点を手がかりとすることもできるが、最終的には文脈などを踏まえて総合的に判断した方が正確かと思われる。ときには中島の記述内容に古峡が修正を加えることもあるが(資料番号 [031\\_008](#)、1941.6.25)、中島の朱記は古峡の書き振りを模倣したものとなっており、中村古峡療養所における療養日誌を用いた日記療法としては、誰が朱記したものにせよ、同じ方向を向いて実施されていたと考えてよいだろう。

<sup>6</sup> 中村古峡『作業療法の指導とその治療的效果』(日本精神医学会 1949) p.40。中村民男の証言は佐々木幹郎「『療養日誌』解題」(『ユリイカ』32(8) 2000.6) による。

<sup>7</sup> 東京(品川御殿山)の診療所とそこに保管されていた古峡著書の在庫は空襲で消失。また戦後の『黎明』復刊後の相談料は 10 円(のちには 20 円)に値上げされている(図表 1 を参照のこと)。

<sup>8</sup> 小田晋「精神医学の見地から見た中村古峡と『変態心理』」(小田(他)編(2001)) pp.20-21

<sup>9</sup> 今回収録された最後の療養日誌(8 月で終了)のあとに、1948 年 9 月から始まる日誌も複数あつたが、日誌の期間が 9 月を超過して 12 月あるいは翌年まで続くため収録は見送った。

<sup>10</sup> 資料群から中原中也の療養日誌等の資料が発見された経緯については、「特集 中原中也」(『ユリイカ』32(8) 2000.6) が詳しい。また中也と古峡の療養日誌を通じたせめぎ合いについては、拙稿「自己を書き綴り、自己を〈調律〉する」(『無数のひとりが紡ぐ歴史』文学通信 2022)を参照のこと。

<sup>11</sup> 12 卷 3 号は資料群に残っていないため未見。この号まで刊行されていたことは、後期最初となる 13 卷 1 号の「千葉寺便り」の記述から確認できる。

<sup>12</sup> 戦前の療養所雑誌はまとまって残されているものが少なく、実態や全体像をとらえるのはなかなか難しい。ただ、療養所内で様々な形態の雑誌が刊行される文化があったことは確かで、結核療養所の清瀬病院では、1937 年頃に頃患者たちから「この環境の中で人間らしい生き方をしたい」との声があがり、医師と共に回覧雑誌「断層」を刊行していたという(同窓会記念誌編集委員会(編)『雑木林』(国立療養所清瀬病院同窓会 1984) p.6,p.106)。また、佐々木啓はプランゲ文庫に残された戦後の結核療養所の文芸雑誌に「復刻」と銘打たれているものがあることを挙げ、こうした活発な活動が戦前からすでに行われていたことを指摘している(「結核患者たちの戦後」(『占領期文化をひらく』早稲田大学出版部 2006))。近年ではハンセン病国立療養所として開設された長島愛生園の機関誌『愛生』(戦前編)や、台湾のハンセン病療養施設であった樂生院の機関誌『万寿果』などが復刻されており(ともに不二出版)、今後の更なる分析が待たれる。ちなみに、『万寿果』(5(2) 1938.6)の「感謝欄」には『黎明』の献本受領の記録が残されており(寄付者は東京在住の一個人)、これら療養所雑誌の相互関係についても検討の必要があると考えられる。なお、戦後の療養所雑誌については、荒井裕樹『隔離の文学』(書肆アルス 2011)や佐々木啓前掲論文などが参考になる。

<sup>13</sup> 古峡資料群に現存する巻号のうちで確認できる最初の号。以後本稿では、残されている巻号のみでは連載等の開始・終了のタイミングが判断できない場合、現存する巻号で確認できたものまでを挙げ、その末尾に「?」を付してその旨を示すこととする。

<sup>14</sup> 『精神分析』(4(6) 1936.11)に掲載された大槻憲二による批判文(「探訪(八)中村古峡療養所」)への反

論を綴った公開状「某精神分析学者に与ふ」(4(1))や、目次に掲げられているが本文が欠落して残っていない「迷信解説」(4(4) –(6))なども含む。なお、「迷信解説」については、同題の記事が「警察講習所講師 中村古峡」の名で『警察協会雑誌』(446–448 1937.7–9)に掲載されている。『黎明』に「迷信解説」が連載されたのが同年の4月から6月だったことを考えると、手元にあった『黎明』から本論掲載ページを切り取り、それをそのまま『警察協会雑誌』の原稿にまわした可能性が高い。

<sup>15</sup> 療養期間の各期の呼称や期間は時期によって異同がある。本文で挙げた区分は『中村古峡療養所案内』(1939)による。

<sup>16</sup> 中村古峡『神経衰弱と強迫観念の全治者体験録』(主婦之友社 1933) p.305, p.348

<sup>17</sup> 療養日誌の一部抜粋を掲載した「私の療養日誌」(7(2))のような変則的なものも含む。また、号をまたいで分載されたものもそれぞれ1本として計数。

<sup>18</sup> 田村憲治は、日本における近代新宗教の「おかげ話」が生み出され流通していく過程において、教団内の新聞・雑誌が極めて重要な役割を担っていたことを指摘する(「近代新宗教説話序説」『説話論集 第11集』清文堂出版 2002)。この面においても、『黎明』誌が近代の〈信仰〉と近しい位置にあったことがうかがわれる。

<sup>19</sup> 『神経衰弱はどうすれば全治するか』に載せられていた〈神経質療法の一般法則〉は一二則だったが、そこに〈神経質療法の根本法則〉として同書に載せられていた二項目(「神経質の治療は絶対に薬剤に頼つてみてはいけない[『黎明』連載時は「絶対に」は削除]」「病気は医者が療すと思ふな」)を追加して「一四ヶ条」としたもの。

<sup>20</sup> 両書ともに、『黎明』に連載してきた評論を一冊にまとめたもの。『強迫観念の全治法』第一編の各章は、後期の13(1)–(7)に連載されている。『神経衰弱の正体』の各章については未所蔵の号に掲載されたものらしく詳細は不明。

<sup>21</sup> 「十七号の発刊に際して」(『開放新聞』17 1955.4.11)

<sup>22</sup> 13号(1954.9.28)、17号(1955.4.11)、18号(1955.7.6)、21号(1956.2.11)が残存。「病院年譜」(前掲『中村古峡と黎明』)によると、『開放新聞』は23号(1956)から、タブロイド版活版印刷の『院内ニュース』となる(当資料については未見)。

<sup>23</sup> 岡上和雄「1953年(TV放映開始)から56年(もはや戦後ではない—経済白書)までのころの中村病院のこと」(前掲『中村古峡と黎明』) p.50

<sup>24</sup> 長谷川貴彦「エゴ・ドキュメント研究の射程」(『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店 2020)